



晴れの元旦、年賀状配達に出発する郵便配達スタッフ。
町村合併で住所が曖昧な中郵便番号は強い味方。
賀状を元に住所録整備です。



元旦マラソンのスタートを待つ参加者。
新市誕生の意気込みも込めてのスタートである。
寒さは厳しいものの幸い晴天の元朝となった。



旧町役場の表札も長岡市寺泊支所と架け変えられて当然
の事であるが一寸変な気分。
消防の出初式も長岡市旗の下での式典。

確率2/7の行方は？



月刊 第 594 号

長岡市になるんだもの雪も仕方ないか——それにしても予想もしなかった早い雪である。弥彦山が三度白くなるとの常識を一足飛びにしての根雪となった。それでも年末には静かな天気

寺泊の正月に蛸はつきもんで獲れたら是非と注文は受けているのに物が無いのはまさに無い袖は振れない。いつ時大物の足は一本四千円もの高値、頭は二本分の値段だから八千円となる。いくら値段はいくらでもと言われてもこれじゃ売られまじと業者も嘆く。せいぜい刺身の注文に少し添えて仕出しするのが精一杯。ようやく待ちに待った年末直前だった一日の風で相当の数があり何となく注文に応じられぬと言った。蛸事情。浜の市場通りは年末年始と順調に客の入り込みがあり、特に秋からの予想以上の来客の勢いを波に乗せて行きたいと張り切って新年を迎えた途端、降り止まぬ雪でアクセス道路の悪条

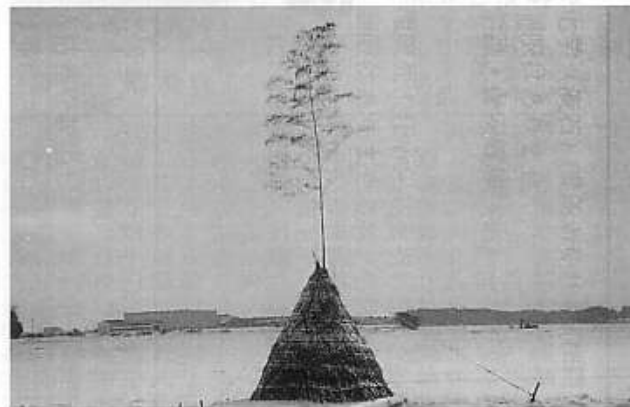
件にはばまれることになってしまった。これは雪のない寺泊にまってはまさにくやしいう事である。降雪予報がニュースで流れる度に宿泊客も含めキャンセルの電話が増えると言っわけ、雪に埋れて日常生活に支障をきたしている山間地の人達を思えば文句の言えたことではないのだが降雪予報には拒否反応気味ですと業者は嘆く。

元旦を境に寺泊町民から長岡市民になったのだが当然の事ながらまだまだ実感がわかない。除夜の鐘は町の寺々で凡そ足並揃えて十一時四十五分頃に撞き始められるのだが二十秒おき位で撞いて行けば六十番目の鐘の音で長岡市になった事になる。個人的には直接関わり合いのある事務手続きが生じて実感することになるのだろうが、大変なのは寺泊支所、大休津出張所の職員のように正月休み明けから連日随分遅くまで灯が消えることはない。又皮肉なことに長岡本所勤務の職員は雪道に難渋、冬期は長岡市内で単身赴任も止むを得ないとのこと。連日のニュースで方々から大雪見舞いの電話を頂いたりしているのだけれど幸い寺泊は雪で困る程のことは今のところ皆無である。寒さは寺泊に限らず全国的なことで大変しいない地方では降雪による障害が色々生じているようでお見舞い上げるところです。

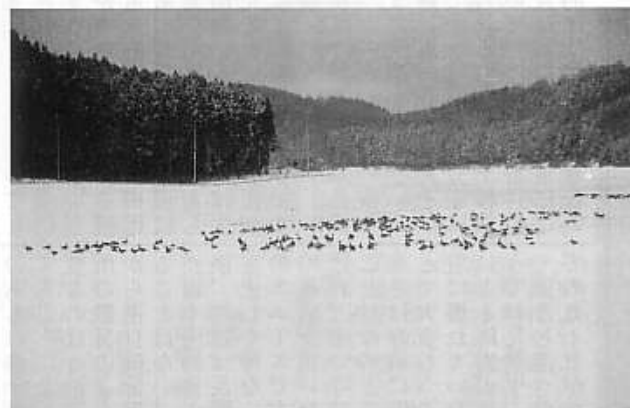
正月と言っても何となく思われ



新年早々町を駆け廻ぐる珍ニュース。悪戯エテ公の出現。警察も出動しての捕物騒ぎ。敵もサル者。ワナも仕掛けられているが未解決状態。



雪原に立つドンド焼きのヤグラ。
中には青竹を組んで点火するとパンパン弾ける仕掛け。
雪の中に立つ姿は孤高と言ったら誉めすぎか。



思わぬ雪に見舞われて思わぬ光景に出会う。
雪原に舞い下りたガンの群。
数ヶ所に百羽位の単位で雪の下の落穂が目当てらしい。

るのは「家」と言うものが壊れつつある象徴のようである。このころ言いたいような不安を感じてしまいます。デパートや外食産業の賑わいと反比例する形で「家庭の賑わい」が損なわれて行くのが何とも悲しいのです。勿論子供が少なく、その上核家族化が進み親戚の付き合いも稀薄になって行くようです。今、各町内では新年総会が開かれる時節ですが、せめて地域の結びつきの大切さが確認されるようにと期待せずにはいられません。

選の確率は2/7、その行方は混沌の中にあります。行政への進言機能としての地区委員と共に町の将来を荷負う大事な人選の為の選挙です。

「ふるさとだより」と私

小岩井 孝三

昭和三十三年金の卵？と言われ「手に職をつければ」と母は自分の経験から強く勧められ「五重の塔」が見え「上野ですか」と尋ねて、あれは池上本門寺だと聞かされ「今日はその上野に行き、はとバスで東京見物に連れてゆく」と大工修行の一日目のスタートは憧れの東京見物からの始まりでした。

区久が原です。近くに大流行していた「夜霧の第二国道」があり夜の使いの時は自転車に乗りながら「フランク永井」になりきって歌ったことを今でも思い出します。

読む物になっていました。新潟地震の寺泊の様子、同じ年の大雪、故郷で家族と正月を、上野のテント村で順番を待ち列車に乗ったのはいいが、散々な目にあつた様子や懐かしい五月の祭りや観音講の事、夏の寺泊が観光地として定着し賑わっている事、これらのふるさとでの便りで望郷の念がつのり十年の東京生活をきりあげてUターンになりました。

町民から市民へ

さとうのふひと

読者諸兄弟の皆様、明けましておめでとございます。この「ふるさとだより」もあと少しです。今年も何とぞよろしくお願ひ申し上げます。
寒い冬です。新潟県は記録的な大雪とのマスコミ報道。実際、十日町から津南に勤める知人の苦勞話を聞き、守門村の友人にいたっては、一月中旬時点で11回も屋根雪を下ろしたという報



ツララなど珍らしくもないのだが、ツララの下がる条件は案外微妙なのである。南に面した屋根に下がるのは更に条件が難しい。



町の火の用心の要、各分団の消防車。各分団は日常の訓練や団員の確保等、若者の不足する中で頑張っている。ほんとにご苦労さま。



海岸の漁業組合の脇にテント張りの作業所がある。捲網の搬送船が入港すると活気づく。今回の漁獲は30トンのサバとアジ。

告を受けました。しかし寺泊は、寒さはともかく、積雪は例年並みと言っていないでしよ。同じ新潟県でも山間地と異なり、雪についてはえらい違いです。雪とところが、テレビや新聞の報道しか知らない世間の人、新潟県全体が大雪と受け取るらしいのです。静岡の友人、東京の友人から相次いでお見舞いの電話が届きました。「こっちはさほどでなくて、地べたが見えてるよ」と言うたびびっくりしてました。

さて、一月一日から地方自治体としての寺泊町が消滅いたしました。喜ぶべきか悲しむべきか複雑な心持ちがいたしますが、まだ実感が湧きません。市町村合併という形式変更が、じ

わじわ内容に及んでくるまでは時間がかりそうです。合併してよかつたか悪かつたかの評価はさらに時間がかかるでしょう。年が改まってすぐのこと、ちよつと聞きたいことがあつて旧寺泊町役場に電話いたしました。係の方から親切にお答えいただいたのはいいのですが、その方は最後に、「詳しくお知らせになりたければ、長岡のほうに聞いて下さい」と言うのです。これには衝撃を受けました。「長岡のほう」とは長岡市役所のことでしようか、本所と言うのでしょうか。

紛れもなく、旧寺泊町役場が「支所」となったことを思い知らされた出来事でした。

東京	旭川市	小平市	大和市	銚子市	松戸市	三島市	群馬県	三鷹市	新潟市	三条市	吉田町	寺泊						
蒲田	田中	小林	加藤	田中	角原	北村	中沢	久世	田辺	玉井	勝本	足立	外山	五十嵐	三本	本田	大塚	
ハル	信明	秀雄	忠司	テル	代野	ヨヒ	順治	里子	環子	富美	ミヤ	スイ	サト	哲夫	實	文雄	文雄	
金三千元	金六千元	金一万元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元

誌代御後援(敬称略・順不同)

清水	茂木	解良	観光	田中	諏訪	柳下	宮村	竹内	山内	田村	田村	山内	国上	マス	てん	小田	渡辺	当銀	赤神	白根
三治	邦子	義一	不二	春雄	利郎	忠義	千代	品代	良平	マサ	ツネ	喜知	美隆	佐二	工門	三治	三治	三治	三治	三治
金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元

寺泊

阿部	波辺	岩船	後藤	あく	京谷	中川	田中	玄徳	解良	寺泊	成田	解良	五十	南雲	山崎	渡部	川原	江合	齊藤
保平	三平	新平	米店	チヨリ	ヨリ	三郎	敏雄	昭	六郎	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭
金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元

寺泊

小波会新春句会詠草

兼題 松の内・白菜他当季
くぐもりし

妻の琴の音松の内

小島 温石

松の内

堆朱の花台白い壺

江原 汀子

醒める間も

東の間なりて松の内

中村 流瓢

松の内

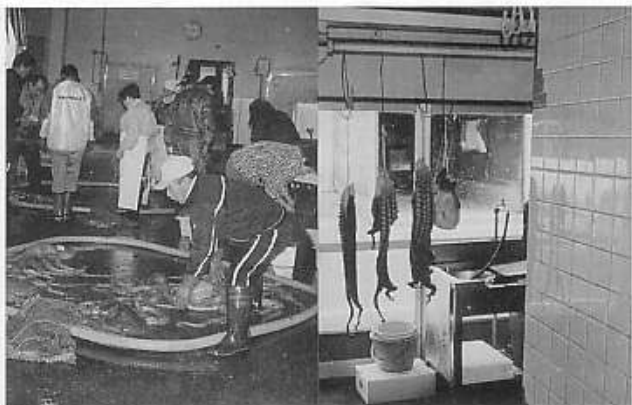
福の神来と戸を開けり

広瀬 洋子

白菜の

香りの高き朝餉かな

竹内 霍山



今年(昨年暮れから)はミズダコが大漁。但し荒天が多く仲々出漁できない。豊作貧乏とまで言う程。やがて右の姿となる。

白菜を

切る音サクと朝明ける

外山 海子

突き出しに

白菜漬の赤提灯

外山 きよし

剥がすほど

大玉白菜器量よく

小島 冬扇

四ツ切りの

白菜で足る鍋囲む

加勢 白汀

海鳴や

柚の香あふる一番湯

能登 頑牛

海峽の

荒ぶる貌に雪しまく

大越 晴夫



アンコウ鍋がグツグツと良い香りと湯気。人間の食欲は何ともしすまじい。この集いは今回で18回目を迎えた。

ぬばたまの

闇より年の立ちかえる

小形 美代

飛行雲

音なく初空つらぬけり

内藤 蓮子

故郷の

氷柱にふれて帰りけり

水沢 蕉子

あとがき

新春第一号のあとがきをお詫びで書き始めなければならぬことをそれぞれお詫び申上げる次第です。

先ず十二月号で計報をお知らせした東京寺泊会名誉会長の古川原実さんについてですが、小川原と書いてしまいました。姓

名の間違いは特に失礼に当たることで、ここに深くお詫び申し上げ訂正いたします。

次に閉町式の記事の中で「コールエコーはまなすの「ふるさと」の合唱の中で」とあとがきでふれておりますが、町のも

う一つの合唱団「あんだんて」の方々も研鑽をつまれ特にこの日の為に練習を重ねて参加されておられたとご指摘を頂き始めて気づいたことで大変申し訳なく謝罪訂正申上げる次第です。

唯ふるさとだよりの性格上記事の正確さよりも情緒的に町の時々の様子をお知らせするお便りであり全国発送で六百通と言

う現状も考慮頂きお許し頂きましたと思っております。



冬場の味覚を支える競場に並んだ魚達。手前はアンコウ、奥はマダラとカニ類。冬の寺泊の代表選手である。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町

ふるさとだより

郵便番号 九四〇一二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二九七番

振替番号 〇〇六二〇三三五四五

印刷所 吉野印刷株式会社

皆様からの寄稿を期待しておりますのでどうぞよろしく。

いよいよ今号を含めあと七号で終刊を迎えます。今号には小岩井さんから小紙への思い出を寄稿頂き有難度うございました。